

倭は特別の毒種

八 木 三 男

一、「倭奴」^{ウエム}

江戸時代に相互に鎖国政策をとりながら、例外的に日朝間には正式の国交があり、將軍の代替わり毎にその襲位を祝うために朝鮮通信使がきた。計十二回に及ぶ。一七一九年、吉宗の將軍職襲位の際の朝鮮通信使随行製述官申維翰と對馬藩真文役①雨森芳州が語氣鋭く問答している（申維翰『海游録』、平凡社）。大意を示せば以下の通り。

「いつか折を見つけて言おうと思っていたのだが、朝鮮の文章を読むと、日本のことに及ぶ場合必ず、倭賊、蛮酋などといって、醜蔑狼藉、いうに忍びないものがある。倭人というのもどうか。日本人といってもらいたい」。雨森は不平の色をなし、次第に怒気さえ露わにした。

申は「倭賊は当然だ」といって、次のようにいい返した。「君が読んだのは誰の本か知らないが、おそらく壬辰・丁酉の倭乱（文祿・慶長の役）秀吉の朝鮮侵略以降のものだ。秀吉はわが国通天の誓であり、宗社の恥辱である。わが国の臣民たるもの、上は蔭紳から厮隸にいたるまで、みなその肉を切り刻んでしまいたい

と思っている。その気持ちに反映しているのだ。しかし、いまは日本に秀吉の遺類がないと聞き、こうして国書を交換して和睦を修めているのである。また、貴国人はわれを呼ぶのに唐（から）人および、韓をカラというのかどうか。

実際に朝鮮は壬辰・丁酉の倭乱に懲りて日本に対する警戒を怠らなかつたから、通信使・製述官・申維翰の任務の一端は、日本が再び朝鮮を侵略する意図をもっているかどうかを探ることであり、したがって彼は日本の兵制に並々ならぬ関心をいだいたのである⁽²⁾。

申は『海游録』を冷静にして比較的公平な観察眼によつて叙述する。しかし「秀吉」にいたると急に平静さを失つて叙述を乱す。「秀吉は奴隸から身を起こして信長に代わつて王となつた。世伝では、秀吉は中国人で、日本に流入した。そのひととなりは樵をする下僕である。信長を弑し、みずから立つて関白になつた」。

以上が史実と異なるのは明らかである。秀吉中国人説はすでに「壬辰の倭乱」の直後、渦中の当事者としてそれを客観的に叙述した柳成龍の『懲步録』^{ちやうふろく}（平凡社）にある。しかし、そこでは、秀吉が信長を弑した者を殺害して王になつた、といっているから、一世紀以上

のちの『海游録』では秀吉の悪役ぶりがいっそう類型化していることが分かる。

『懲步録』では侵略軍の総師としてソウルや平壤まで進撃し、朝鮮当局と交渉にあたつた小西行長はさして暴虐な人間として描かれていないのに対して、秀吉を「蛮酋」あるいは「平賊」⁽³⁾と呼称するのは当然として、もう一人最悪の暴虐者として、また戦闘にたけた賊将として恐れられたのは加藤清正である。彼はまた講和の妨害者としてもたち現れる。『海游録』も「清正はもつとも凶悪であり、わが国の讐を怨むことは、必ずその人をもつて筆頭とする」という。韓国ではむしろ子をあやすとき「清正がくる」といえば泣き止むと聞いたことがある。

いずれにしても、「壬辰の倭乱」の戦闘で無辜の朝鮮人七人に一人が殺され、餓死し、国土が荒廃した。五万人におよぶ朝鮮人が奴隸として日本に強制連行されたという。日本を「野蛮国」と考えたのは当然であつた。

秀吉の軍隊が朝鮮から撤退したのち、ときの国王宣祖が明におくつた国書で、「これ倭は特別の毒種であり敵邦はこの賊と不幸にも隣国を為す」といった。正式

の国書にも呼称されるほどに、日本人は朝鮮人にとって「賊」であり、また「倭賊」「倭奴」であった。とくに「倭奴」は以後歴史的慣用語になった。

これらとは反対に家康は特別に「人傑」として待遇される⁽⁴⁾。「秀吉は関東に拠った家康を攻めたが降せなかった。秀吉は死に臨んで子秀頼を家康に托す。家康は久しからずしてこれを撃斬し、ついに豊臣一族を誅した。けだしまた人傑である」『海游録』。家康は対馬藩の積極的な工作もうけて朝鮮と講和し、一六〇七年第一回目の朝鮮使節（回答兼刷還使）を迎えた。また、連行した捕虜のうち一万人を送還した。

(1) 真文とは漢文のこと。儒者があたる。雨森は近江の出身。新井白石と同じ木下順庵門下。朝鮮語、中国語に通じ、朝鮮交通に精通。

(2) 秀吉の侵略後は、朝鮮側は日本の使者を釜山の東萊府使が応接し、ソウルや内陸への旅行を禁じた。

(3) 『海游録』では豊臣秀吉を平秀吉とする。信長は源平交替説の影響から、足利（源氏）について平氏を名乗った。秀吉も一五八五年内大臣に就任するにあたって平氏を称した。

(4) 一九七〇年代の韓国で、山岡荘八の『徳川家康』が『大

望』と題されて二万セット、四〇万冊を超える空前のベストセラーになった（鄭大均『韓国のイメージ』、中公新書）。

二、『老松堂日本行録』

一四二〇（朝鮮世宗二）年に室町幕府將軍足利義持に謁見した回礼使、宋希璟の『老松堂日本行録』（岩波文庫）は、最古の朝鮮人による日本紀行といわれる。困難な外交使命を佩びながら、形式はむしろ駢藻として伸びやかな詩文集である。五言・七言の漢詩と散文の序で記録される。

前年（一四一九年）朝鮮は倭寇の根拠地との疑いをもつて対馬を攻撃した。応永の外寇（朝鮮では己亥東征）という。室町幕府は朝鮮の真意を探るために、大蔵経請求に托して、朝鮮に使者を送った。宋希璟はその回礼使である。

『老松堂日本行録』では、わが国を一貫して日本と記し、日本人を倭という。ときに日本の俗を評して「能く礼儀を知れり」とも記す。これは対明、対朝鮮国交回復にあたって足利義満が称した「日本国王源道義」にそったものである。ただし、宋希璟はときに中国流

に日本を「扶桑」というケースがあった。いずれにしても、ここには雨森芳州がいうような「醜蔑狼藉」な言葉はなにひとつない。それらの言葉が壬辰・丁酉の倭乱を境にして現れることが知れる。

ちなみに、応永の外寇の処理過程で奇怪な事件が起きた。一四二〇年、対馬島主宗貞盛の使者時応界都なるものが、講和条件として、対馬を朝鮮の慶尚道の属州とし、貞盛は朝鮮から印信を受けて臣下となる、旨を提示し、朝鮮王がそれを許したというのである。実際は宗貞盛の関知するところではなく、倭寇の一派が朝鮮との交易をのぞむ勢力の策略だったらしい。宋希環は朝鮮が対馬を領土とする積極的な企図がないことを明らかにした。現在の韓国人の一部に対馬を韓国の固有の領土とする考えがあるらしいのは、この辺に胚胎するのも知れない。

三、植民地下の「倭奴」

「倭賊」「倭奴」「蛮酋」といった言葉は、日本の植民地下の朝鮮人に引き継がれる。『白凡逸志』金九自叙伝（平凡社）は日本を「倭」といい、逮捕された金九を尋問し、拷問する日本の刑事は「倭奴」であり、田

中義一は「倭仇」、八月一日「倭敵」が降伏する。ただし、朝鮮の共産主義者を指導する福本和夫は「日本人」といわれる。また、同じ日本人でもある時は「倭奴」、ある時は「日本人」と使い分ける。

一九一九年の三・一独立運動を中心にした浩瀚な記録である朴殷植の『朝鮮独立運動の血史』（平凡社）はほとんどを日本、日本人で通すが、暗殺される伊藤博文を格別の憎しみをもって「老賊」といった。また日本兵の銃撃に会い、死んでいく十二歳の少年に、近く日本人医師の治療を拒み「たとえ死んでも倭奴の治療はうけない」といわしめた。村人を教会堂に集めて焼き殺した水原堤巖里の惨劇をはじめ、この独立運動だけでも獄死者を除いて七千五百人の朝鮮人が日本の官憲によって殺された。

朝鮮在留三十年におよんだアメリカ人宣教師アンダーウッドは三・一独立運動を目撃して次のようにいった。朝鮮人は日本を「加害、圧迫を発生させる先天的仇敵」と考えている。朝鮮民族は、歴史的に日本民族と親愛の記憶がない。ただ、『日本を見返すのはいつの日か、いつの日か』と思っている。

四、韓国の英雄たち

ソウルから車で二時間ほどの温陽という温泉町の郊

外に尹奉吉の顕彰祠がある。その英文案内板に shine とあった。雰囲気はほとんど日本の神社である。神殿にあたる建物の内部は飾りつけのないガラソウで、中央に花で飾られた尹奉吉の遺影がおかれていた。

尹奉吉は上海虹口の青物市場の野菜商人であった。

一九三二年上海事変の戦火がおさまりかけた四月二十九日の天長節祝賀会場で、陸軍大将白川義則を爆殺し、野村吉三郎、重光葵らに重傷をおわせて処刑された。「上海虹口公園事件」である。三・一独立運動を契機に組織された上海における大韓民国臨時政府國務委員主席金九の指令をうけたものという（『白凡逸志』）。

この祠は一九七〇年代に朴正熙のナショナリズムの昂揚期に建てられたが、現在の韓国の進歩派はこれを批判的に見ているようだ。わたくしが宿泊した温陽市附近には、中国や韓国への「侵略」を認めない日本の教科書問題に反発して朴正熙時代につくられ、日本の統治時代の暴虐をリアルに告発、展示した独立記念館や亀甲船を率いて秀吉の大軍を海戦で敗走させた李舜

臣の祠堂などがある。前者は朴正熙時代の軍事独裁とそのナショナリズムの評価とかわって韓国国内での評価は分かれているらしい。

韓国の英雄は一四四三年に訓民正音（ハングル）かな文字）を創製した李氏朝鮮の王、世宗（二万ウォン紙幣の肖像を除けば、他はすべて日本の侵略や暴虐に抵抗した独立運動の義士である。筆頭は三・一独立運動で隊列の先頭に立ってたおれた韓国のジャンヌダルクといわれる梨花女子大生柳寛順。次いで李舜臣、朝鮮植民地化の最も積極的な推進者、朝鮮統監伊藤博文を暗殺した安重根である。ソウルに安重根義士記念館がある（未見）。

安重根は一九〇七年、日本が韓国の軍隊を解散させ、人民が武装解除されたあと、シベリアで義兵によるバルチザンを組織し、満州を視察中の伊藤をハルビン駅頭で狙撃した。安は「朝鮮独立万歳」を三唱して捕縛された（『朝鮮独立運動の血史』）。

『白凡逸志』によると、日本が敗北して朝鮮が解放された翌一九四六年、尹奉吉をはじめ、天皇裕仁の車に爆弾を投げたいわゆる「桜田門不敬事件（一九三二年）」の李奉昌や一九三三年に有吉中国駐在大使暗殺を

企図して逮捕され、長崎刑務所で獄死した白貞基の三人の遺骨を奉じて、ソウルの孝昌公園の墓所に埋葬することになったが、最上の場所は安重根の遺骨を奉安する場所としてあけておいた、とある。他の英雄たちと比べても安重根の評価の高さが分かる。

五、「野蛮国」日本

一九一九年の三・一独立運動で宣言された「日本に通告する書」で朝鮮文化の優越性を掲げた。「飲食衣類にいたるまで、朝鮮の文化的に高級なるに比し、日本のそれが実質的価値においていかに低劣であるかは、もとより定評のあるところ」。仏教国日本に対して、李氏朝鮮の「崇儒排仏」以来の社会基盤としての儒教の優秀性をいった。

同年、上海にいた反日闘争の組織者、新大韓青年党呂運亨は日本政府の招待に応じ、帝国ホテルで演説した。「日本は朝鮮に対し、文化上の負債者である。日本の文学、美術、工芸その他もろもろの文明は、みな朝鮮に学んだものではないか」『朝鮮独立運動の血史』。上記のような日朝比較文化、文明論の当否を別にしても、欧米の文化レベルに比して当時の日本人庶民の

生活文化レベルは、それから二十数年後のわたくしの経験に徴してもきわめて低く、朴殷植が嘲笑うように「日本人がふんどし一つの裸でいることや、淫売の習慣や、男女間の風紀の紊乱などがあった。しかし、「ふんどし」を除けば、過去も現在も日本や他の文明国、発展途上国を問わず普遍的に存在する実態でもあるわけで、これは朝鮮の儒教的知識人の批判と考えればよいであろう。

現在の韓国人も日本における従兄妹同士の結婚を野蛮だと痛烈に批判する（金鉉球『金教授の日本談義』、桐書房）。韓国には「同姓同本は娶らず」という民法上も規定される鉄則がある。本とは「本貫」すなわち氏族発祥地、日本の本籍地と類似するもの。『海游録』付編「日本見聞雜録」は、従兄妹同士の結婚を野蛮とした後、「淫穢の行はすなわち禽獣と同じく、家々では必ず浴室を設け男女が裸で入浴し、白昼からなれあう。夜は必ず灯を設けて淫をおこなう」といった。実際に江戸時代特有の退廃もあつたが、「男女之分」が厳しい朝鮮風俗とりわけ儒教倫理から見た「野蛮」である。

しかし、これらの批判の基底には歴史的に朝鮮に対して暴虐をほしきままにしてきた日本の野蛮性に対す

る抑えがたい怒りとともに、抵抗的民族主義としての自らの文化的、道徳的優位性についての誇示がある。しかし、「野蛮国日本」という認識は戦後は薄められてはいても、現在の多くの韓国人のものでもあろう。

戦後の日本は半世紀以上にわたって経済的にはともかく、基本として政治的・軍事的には他のアジア諸国に対する抑圧者ではなかった。明治七（一九七四）年の台湾出兵以来さきの敗戦までの約七十年間に、朝鮮や台湾に対する軍事的植民地支配のほかに、少なくとも十度にわたって外国を侵略し、無数のアジア人その他を殺害したが、この半世紀日本の軍隊は一人の外国人も殺していない。国内でも一九六〇年の安保闘争以来、権力が戦前のように直接暴力的に人命を奪ったケースがない。これは戦後もたびたび他国に出兵したアメリカやソ連、フランス等に比べても誇りうるものである。いうまでもなく、憲法第九条を支えに国民のためみない平和のための闘いがあったからである。これは国際的に「野蛮国」とはいえない。

しかし、韓国人にとっては日本が相変わらず「野蛮国」でありうる。戦後も日本政府がアメリカに従属したサンフランシスコ条約と安保条約体制下で、韓国に

対する戦後補償を十分にせず、かえって戦後五十年の衆議院決議に見られるように、「反省」をいっても「謝罪」せず、戦争責任を曖昧にただけでなく、保守的政治家たちやそれを支えるイデオログが繰り返して朝鮮の植民地支配を合理化してきたからである。

それだけではない。最近あらためて国の関与があきらかになった韓国女性を主力にした「従軍慰安婦」問題⁽¹⁾で、一九九六年の国連人権委員会で採択されたR・クマラスワミ報告や九八年の同小委員会の特別報告の勧告にもかかわらず、賠償は解決済みとして、公式の国による謝罪と賠償を拒否するなど、日本政府は戦争責任に対する国際的基準をあえて踏みにじっている。また、「従軍慰安婦」の存在すら否定する者がいる。これは、ドイツの戦後補償に比べて経済大国としての文明度を著しく損なうものである。「野蛮国」「倭奴」に値するともいえる。

いずれにしても、新しい日韓の交流の大前提は日本政府による朝鮮植民地支配に対する正式の謝罪と、それに伴う少なくとも従軍慰安婦に対する日本政府による賠償、世界平和にむけた正しい歴史認識を確立することである。

(1)慰安所の設置、管理・運営、慰安婦の徴募などあらゆる面で「旧日本軍が直接あるいは間接に関与」したことは、九三年八月の内閣官房長官談話が公式に認めた。

六、韓国のナシヨナリズム

いま、現在の韓国のナシヨナリズムを批判的に検討する力も時間の余裕もないが、韓国の対日ナシヨナリズムを中心とするナシヨナリズム全体に普遍性があるとは到底思えない。

韓国民が日本の戦争責任問題を追及しているかぎり、それは国連を中心に形成されてきた平和と人権の国際的基準の一端に寄与することは明らかである。しかし、それはきわめて本質的ではあるが、日本のみならず韓国においても、政治的市民的権利や環境の問題等として市民生活すべての面にわたって貫徹されなければならない基準の一つの側面にすぎない。たとえば、制定以来五〇年を経過した韓国の「国家保安法」は戦前の日本の「治安維持法」のように、これまで「反国家活動」「反国家団体」を理由に数十万人を逮捕・投獄してきた。これは分断国家という特殊な条件を考慮しても、政治的市民的権利の擁護者でなければならない近代国

家としての条件を欠くことになるう。

解放後とくに李承晩や朴正熙時代の韓国において、反日主義は反共主義と並ぶ国民統合の道具であり、現在反日主義が相対的により強く韓国のナシヨナリズムの基本を形づくっているように見える。それには政策的につくられた日本および日本人に対するステレオタイプな偏見も含まれる。一般にナシヨナリズムはある種の偏狭さと夜郎自大を免れない。世界の趨勢はナシヨナリズム（民族主義）やネーション（民族）そのものの再検討すなわち対象化、相対化にはいつて久しい。政治目標としても歴史認識や社会科学の範疇としてもその普遍性と有効性を失ないつつある。韓国がいかに民族的、政治的単位としてのネーションの単一性を誇っても、その趨勢から逃れることはできない。

それだけではなく、昨年（九七年）末の通貨危機を契機に始まったIMF（国際通貨基金）統治下において、韓国における政治・経済の国際的基準による改変は避けられず、韓国民全体の自信の沮喪とともに、そのナシヨナリズムも変貌を余儀なくされるであろう。韓国はいまや確実にその転換期に入った。

（やぎみつお・いがた県民教育研究所所長）